

秋の教養講座

一放送から29年、「バロン薩摩の夢を追う」取材回想

11月23日(祝・月) 15時から 放送大学奈良学習センターほかで開催

野島 正興(副会長)



薩摩治郎八 (さつま じろはち)
(1901-1976)

バロン薩摩こと薩摩治郎八は大正末から昭和の初めにかけてパリで活躍したもはや伝説の人物である。フランス滞在中に使った費用は現在のお金なら500億円を下らないとされる。多くの美術、音楽、舞踊、文学などの芸術家と交流し日本に紹介。いわば日仏文化交流の草分け的存在である。フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を二度受章している。現在、唯一形となって残るものは、彼がパリ大学都市に建設・寄贈した日本館であり、現在も世界各国からの芸術・学術の徒がここに滞在する。瀬戸内寂聴『ゆきてかえらぬ』、獅子文六『但馬太郎治伝』はいずれも薩摩治郎八をモデルとした小説として知られる。

私は以前、NHK徳島放送局に勤務し、薩摩終焉の地となった徳島に多くの遺品が保管されていることを聞いた。この遺品の文書類などを手がかりに、徳島「バロン・サツマの会」の協力を得て、『薩摩治郎八年譜』(新垣宏一四国大学教授編集)を作成。これを基礎として、私は薩摩治郎八が追い求めた夢は何だったのかを探る四国特集「バロン薩摩の夢を追う」(1986.11.28放送)を企画する機会を得ることになった。番組はのちにBS全国放送となり、放送直後、関西日仏学館(現アンスティチュ・フランセ京都)のミッシェル・ワッセルマン館長から電話を受け、番組について講演依頼されたことは驚きとともに印象深い。

ところで、薩摩治郎八の自伝『せ・し・ぼん』には、彼自身の人生を象徴的に語る興味深い二つの文章が見られる。

「生活と美を一致させようとした一種の芸術的創造」

「夢と機会が偶然交触することによって人生の蜃気楼は生まれ出る」

今回は企画、取材、制作の場面を回想し、薩摩治郎八の実績と人物像、放送から29年を経て思う新たな視点についてお話し上げたい。

さて、10年後の2025年は薩摩が招致した東京帝国ホテルでの「アンリ・ジルマルシェックスピアノ演奏会」(1925)から100年となる。後年、ジルマルシェックスが音楽院長を務めた「ボワチエ音楽院」のフランス人ピアニストの協力を得て、「ジルマルシェックス帝国ホテルピアノ演奏会100年、あの日のプログラム」を何らかの形で実現できないかと、これは私の・・・やはり夢の企画であろうか。

日時：2015年11月23日(祝・月)

1) 講演会 15:00~17:00 (参加無料)

放送大学奈良学習センターZ308 講義室にて

2) 懇親会 17:20~19:00 頃

(参加費：会員3000円、一般3500円)

野菜ダイニング「菜宴」にて

主催：奈良日仏協会

放送大学奈良学習センター

参加申込：本号同封のチラシをご覧ください。

ホームページが新しくなりました

前号のMon Naraでお知らせしましたように奈良日仏協会のホームページは6月3日以来閉鎖されていましたが、8月3日に新しいホームページが完成し、その後少しずつコンテンツを充実させております。このエレガントに変身したホームページをぜひごらんになってください。運営は以下のメンバーが担当していますが、ご意見、ご提案などがございましたらホームページの「お問い合わせ」欄を通じてお知らせください。

久保田(ホームページ管理担当) 三野(会長) 浅井(事務局長)

フランス文学の庭から <41>

三野博司 (会長)

名句の花束

— étroite à n'y pouvoir marcher deux de front
 二人並んでは通れないくらい狭いのです (2)
 (ジッド『狭き門』1909年)

15歳のころからジッドは従姉マドレーヌ・ロンドーを愛していました。22歳のときに発表した処女作『アンドレ・ワルテルの手記』に語られたエマニュエルへの愛は、そのままマドレーヌへの愛の言葉でした。それは肉欲とは無縁な、神秘的なまでに純粋な愛の物語なのです。そのマドレーヌと結婚したあと、2年前に強烈な太陽のもとで生命の蘇生を感じたアルジェリアを、1895年に今度は妻を伴って再訪します。このとき、彼は少年愛のなかにみずからの解放を見いだすことになります。妻となった女性への純化された愛と、北アフリカの少年に対する激しい情欲と、やはりジッドは複雑な人です。

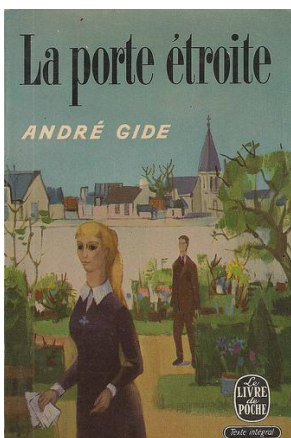


アンドレ・ジッド
 (1869-1951)

1909年に発表された『狭き門』の題名は、ルカによる福音書第13章24節「力を尽くして狭き門より入れ」に基づいています。作者の分身とみなすことができるジェロームが「私」として語り、彼の目からアリサの言動が描かれ、二人がやりとりした手紙もふんだんに引用されます。アリサは、ジッドの従姉で妻となったマドレーヌがモデルとなっています。彼女はジェロームとの結婚を拒み続け、世俗的な愛の望みを退け、神へ至る道はただ一人しか赴けないと言って、最後は療養所で孤独のうちに死ぬことになります。ジッド自身のプロテスタント心性がアリサに投影され、そのアリサの悲劇を描いて、プロテスタントの精神を批判したといわれています。このあたりも手が込んでいるという感じです。

ジェロームの目にとって、自分を避け続けるアリサの言動は不可解に映りますが、小説の末尾にはアリサの「日記」が置かれ、彼女の心情がいくぶんかは明らかにされます。その日記には表題「狭き門」を連想させる次の一節があります。

La route que vous nous enseignez, Seigneur, est une route étroite — étroite à n'y pouvoir marcher deux de front. (主よ、あなたが示したまう その道は狭いのです — 二人並んでは通れないほど狭いのです。)



ここだけを読むと、アリサの物語は、神への愛をまっとうするために地上の愛を断念した聖女の物語になってしまいます。けれども、この小説はそれほど単純に書かれてはいません。アリサをそんな悲劇へ追いやったのは、ジェロームにも責任の一端があるでしょう。ジェローム自身が、いくぶんかはそれに気づいていました。次第に開いていくアリサとの溝がもう取り返しのつかないものになったと思われたとき、彼はこう語るのです。「僕はアリサを徐々に高い場所に祭り上げ、自分好みの附属品で飾り立て、彼女を偶像に仕立てあげたのだが、その作業の結果残ったのは、疲労だけではなかったか？」

確かにアリサにとって不幸だったのは、ジェロームがあまりにも自分を理想化していると感じ、そのイメージに迫りつくことができなかったことでしょう。それが彼女には神へと逃げる理由になったともいえます。しかしまた、アリサのような人はどんな状況にあっても幸福になれないようにも思われます。彼女は幸福になることを恐れる心性の持ち主であり、その点で、どんな環境にあってもそこに自分なりの幸福を見出していく妹ジュリエットとは対照的です。ジッドは二人を描きわけて、この小説を「アリサの日記」で終わらせるのではなく、最後はジュリエットのたくましい姿で結んでいます。

「牛」に願いをこめて

京の町に祇園囃子が響く頃、7月22～26日の5日間、京都文化博物館において、個展を開催いたしました。地元の方はじめ、東京から関西まで、いろいろな方面から千人以上の方が見に来てくださいました。牛は土着性が強く、素朴でユーモアに富んでいるのに魅せられ、いろいろな牛に出会いたくて、フランスをはじめ、これまで17ヶ国を訪れました。

「牛」という作品の画題としては吉野杉をキャンバスにと思いつき、自然な牛の想いを表現できればと描き続けてまいりました作品集です。今回の個展では、物体を素直に描いた高校生の頃の作品、パリのエコール・デ・

ボザール留学中、Zavaro 教授のアトリエで描いたヌードの油絵、教諭になったころ描いた牛の群像、20年前より吉野杉をキャンバスにした作品など、パリで開いた個展の作品を含め60点を展示しました。



開期中、一番うれしかったことは、パリ留学時代の恩師 Zavaro 教授より次のような励ましの手紙をいただいたことです。「あなたの作品は力強さと威厳に満ちています。あなたは私の教え子の中で、最も異文化の恩恵を受けた一人でしょう。これからも、ずっとこの道を歩み続けられることを強く願っています」。

たくさんの皆様からいただいたお言葉も、たいへん嬉しく思っております。皆様に感動していただける作品を、いま以上に私の想いを表現し、画業に専念いたしてまいります。

(赤木睦代)

フランス語で読む日本古典：『源氏物語』須磨の巻（12帖）から

いくつかの古注には『源氏物語』が現在冒頭にある「桐壺」の巻から書き始められたのではなく、「須磨」の巻から起筆されたとする伝承があります。某書には村上天皇の娘、選子内親王から新しい物語を所望されて石山寺にこもって構想を練っていたところ8月15日夜、琵琶湖の湖面に映った月を見て源氏物語の構想を思いついて須磨の巻「今宵は十五夜なりと思し出でて」から書き始められたと言われます。いづれにしても「須磨」の帖は見過ごすことのできない、光源氏にとって大きな試練の時期の物語です。

(中浦東洋司)

À Suma, au vent d'automne qui accable les esprits, encore que la mer fût assez éloignée, des vagues du rivage soulevées par ce vent dont Yukihiro le Moyen Conseiller disait que « le souffle franchit la barrière », nuit après nuit, le bruit en vérité sonnait tout proche, et rien n'était mélancolique autant que l'automne en pareil lieu. Dans le silence de la nuit, car bien peu nombreux étaient ceux qui l'entouraient, seul éveillé, quand il souleva la tête pour entendre l'ouragan qui faisait rage aux quatre horizons, il eut le sentiment que les vagues déferlaient à son chevet, et sans qu'il en eût conscience ses larmes coulaient à faire chavirer son appui-tête. Il pinça la cithare ; et les quelques accords que pourtant il en tirait lui-même rendaient un son si lugubre qu'il les interrompit : « D'amour je languis / et les vagues du rivage / se mêlent à mes sanglots / se pourrait-il que ce vent / vienne de celle que j'aime »

(traduit par René Sieffert)

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、関吹きこゆると言ひけむ浦波、よるよるは、げにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかるところの秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目を覚まして、枕をそばだてて四方よもの嵐を聞き給ふに、波ただこもとに立ち来る心地して、涙落つとも覚えぬに、枕が浮かばかりになりけり。琴を少しかき鳴らし給へるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさし給ひて、

< 恋ひわびて 泣く音にまがふ 浦波は思ふ方より 風や吹くらむ > とうたひ給へる。

ガイドクラブ勉強会 (9/19) 報告

ずいぶん前には、フランス語圏の人たちと一緒に、奈良の観光地（主に神社仏閣）へ行くことが毎年ありましたが、ここ数年はそんな機会もなく、ちょっと寂しいな、年をとったんだなあ、と感じていました。そんな私は、ガイドクラブ再開のお知らせに、わくわく。生駒市の芸術会館美楽来での勉強会で、先ず浅井先生からテーマである浄瑠璃寺について、和辻哲郎と堀辰雄が浄瑠璃を訪ねていたことについて、お話がありました。そして、フランス人にして仏教の研究家である、ピエール・レニエ先生のお話は、少し難しくもありますが興味深く、講師としては最高です！ 浄瑠璃寺のパンフレットの仏訳を少しずつ読み、いくつかの仏教用語の仏訳の資料もいただきました。この良き季節に先生たちと、静かな浄瑠璃寺を散策する日を、心待ちにしています。（森裕子）

9月19日、ガイドクラブの勉強会で浄瑠璃寺について学びました。私は茨木市に住んでおり、フランス語の勉強も長い間休んでいたのですが、なぜか強く惹かれるものがあって、参加しました。あらかじめ、浄瑠璃寺に関するフランス語のテキスト（写真入り）、和辻哲郎・堀辰雄の文章、お寺のパンフレットを送っていただき、これらを読むと自然にイメージがふくらんできました。勉強会では、フランス語のテキストに従って **le pavillon principal**（本堂）、**les lanternes en pierre**（石灯籠）、**la pagode à trois étages**（三重塔）、と読み進めていきました。講師のピエール・レニエ先生は真言宗の研究をなさっているということで、仏教に関する語彙もていねいに説明していただきました。仏教用語は日本語でもいざ説明しようとすると難しいですが、フランス語訳を見て、なるほど、と思いました。とてもよい勉強になりました。これを機会に奈良日仏協会に入会させていただくことになり、皆さまとともに楽しく学んでゆきたいと思っています。（小原千賀子）



奈良近郊に少し変わった名前のお寺があることを知ったのは、高校生になって最初の授業で堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」を読んだのがきっかけでした。馬酔木の花をみて交わされる夫婦の会話からのどかな風景が想像され、以来「浄瑠璃寺」と「馬酔木」の二つの名は、私の記憶の片すみで夢想を誘うようになりました。それから十年ほどした3月の末、友人とはじめて浄瑠璃寺を訪れたとき、ひっそりとした小さな門の前の小道に馬酔木が可憐な白い花を咲かせている姿が深く印象に残りました。時を経てこのたび、奈良日仏協会のガイドクラブで浄瑠璃寺を散策することになり、副住職の佐伯功勝さんにお話を伺うことができました。江戸時代後期に無住となり、明治の廃仏毀釈の苦難の時期には、村人たちがお寺を守ってくれたそうです。平安時代に最澄・空海らによって宗派が確立される以前の「奈良仏教」の持つ懐の深さ、いい意味での「曖昧さ」が、日本人の素朴な仏教信仰と通じ合うのではないかとのことでした。勉強会ではレニエ先生から、浄土式庭園で中央の池をはさんで東と西に立つ石灯籠は「此岸」と「彼岸」を示し、東側にある薬師如来を安置する三重塔は「東方浄土」、西側の九体阿弥陀仏を安置する「本堂」が目標とする「西方浄土」なので、お寺の門を入ったらすぐに本堂に行かないで、三重塔から先にお参りするのが本来の順序という解説がありました。パンフレットにも書かれており、今までも知識としては知っていたはずですが、これまで無頓着に本堂からお参りしていました。10月10日の散策では、三重塔から回ることが楽しみになりました。（浅井直子）



日本に関心を持つフランコフォンの多くは、日本を訪れたら仏教やお寺について、もっとよく理解したいと思っています。そんな彼らを迎える人たちが、仏教の基本的なことを説明できたらきっと役立ちます。くつろぎながらの勉強の雰囲気の中で、そうした話をするのができてとても嬉しく思いました。浄瑠璃寺たった一つのお寺に的を絞っても、仏教の領域はきわめて広く、時間がたつのも気づかず話すことができます。与えられた2時間はとても短かったのですが、フランス語で仏教について話すのに有用な用語に慣れ親しんで、独特で興味深いこの浄瑠璃寺の特徴を知ることができました。まだはじめての一步に過ぎませんが、奈良とこの地方の文化の豊かさについて、参加者の皆さんがフランス語で紹介するためのお手伝いができればと思います。（ピエール・レニエ）



「マグリット・ワールド」に吸い込まれ…

広告に描かれている「ピレネーの城」に印象を受け、他にどのような作品が並んでいるのだろうと期待を膨らませながら先日、京都市美術館で開催されたマグリット展に行きました。作品を見ていると、フランス人の方も来られていて、フランスでも人気のある画家なのかなと思いました。マグリット (René François Ghislain Magritte, 1898 年 11 月 21 日-1967 年 8 月 15 日) はベルギーの画家で、20 世紀前半フランスの詩人アンドレ・ブルトンが提唱したヨーロッパ近代絵画の芸術運動“シュルレアリスム”(超現実主義)の画家の一員です。非現実的な世界の表現を目指したもので、制作方法においても伝統的なものではなく、様々な新しい技法を用いて考え出されています。一見、日常的で平凡そのものに見える作品もマグリットの手にかければ私たちの先入観や固定観念は大きく覆され、同時にマグリットワールド

に吸い込まれていきます。中でも「光の帝国Ⅱ」は上半分がきれいな青空、下半分はガス燈が一つ、家の正面を照らしている夜の通りが描かれています。昼と夜、太陽と月は決して共存することはありません。だとするとこの作品には一体どのような時間が流れているのだろう、と考えれば考えるほど面白味のある作品でした。マグリット展を見ているときは、自分自身も日常の世界から解放されたような時が流れていました。(駒田奈美)



Recette de la «Tarte à l'oignon» 坂本ミリアムさん(奈良市高畑町)特製「オニオン・タルト」の作り方を教えてもらいました。じっさいに作ってみると思っていたより簡単で、材料や分量も好みで調整可。食欲の秋におすすめの一品です。(編集部)

【材料】小麦粉 300 グラム、バター 150 グラム、水適量、オリーブ油、玉ねぎ 1 kg、卵 2 つ、生クリーム適量、塩、胡椒、ナツメグ

【Ingrédients】300g. de farine, 150g. de beurre, eau, huile d'olive, 1 kg. d'oignons, deux œufs, 1-2 dl. de crème, sel, poivre, noix de muscade

①バターは室温にもどしておく。Faire ramollir le beurre à température ambiante.

②小麦粉をボールに入れ、細かくカットしたバターとまぜあわせる。

Mettre la farine dans un grand bol et la mélanger avec le beurre coupé en petits morceaux.

③水を少しずつ足していって、「耳たぶ」くらいの柔らかさの生地にする。

Incorporer petit à petit l'eau au besoin, jusqu'à ce que la pâte ait la souplesse d'un lobe d'oreille.

④ラップに包んで、冷蔵庫でしばらく休ませる。Envelopper la pâte dans un film plastique et la laisser reposer.

⑤麺棒で生地をのばす。Étaler la pâte avec un rouleau à pâtisserie et former un disque.

⑥四つ折りにして型に入れ、広げて破れないようにしながら型に敷き詰める。

Plier la pâte en quatre et la déplier dans le moule en faisant attention de ne pas la déchirer.

⑦玉ねぎを石のようにコロコロした形に切り、水分を飛ばすようにオリーブオイルで中火でゆっくり炒める。

Couper les oignons en dés et les faire revenir lentement à feu moyen avec l'huile d'olive.

⑧火を消して小麦粉大さじ山盛り一杯をつなぎとしてふり入れ混ぜる。

Retirer du feu et saupoudrer d'une cuillère à soupe de farine pour lier.

⑨少し冷まして卵を一つずつ入れ、混ぜる。Laisser refroidir un peu et incorporer les œufs un par un.

⑩生クリームを加えて混ぜる。塩・胡椒・ナツメグを入れ混ぜ、味を調節する。

Ajouter la crème et mélanger. Saler, poivrer et ajouter la noix de muscade selon votre goût.

⑪タルト生地にフィリングを流し込み、あらかじめ温めておいたオーブンで 30~40 分、180℃~210℃で焼く。

Verser l'appareil dans la pâte et enfourner pendant 30-40 minutes à 180-210°C.



第 39 回 奈良日仏協会シネクラブ例会 (10/25) 案内

★10 月 25 日 (日) 13:30~17:00 ★会場: 奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室

★プログラム: アラン・レネ監督『六つの心』(Cœurs, 2006 年, 126 分) ★参加費: 会員無料、一般 300 円

★飲み会: 例会終了後「味楽座」にて ★問合わせ: tel. 0743-74-0371 Nasai206@gmail.com (予約不要)

★今秋からアラン・レネ特集をお送りします。フランス語原題の直訳は『心』ですが、邦題には「六つの」が加えられています。パリに暮らす 6 人の登場人物が出会ったりすれ違ったりしながら、内なる「心」のドラマが描かれているからでしょうか。それぞれの流儀で仕事やプライベートを大切にしながら、彼らが孤独と自由を享受して生きる生活空間、室内のインテリアや冬のパリの雪景色の映像も見ごたえがあります。



第 127 回 フランス・アラカルト (9/7) 報告

9月7日(土曜日)の14時からレストラン「菜宴」にて、米津春日氏を囲んで、「Cuisine Familiale avec Monsieur YONEZU」と題した、家庭で簡単に作れる美味しいフランス料理の講習会がありました。参加者は20名(うち会員9名)。最初に、来られた方から順番に米津先生と記念撮影。仲井先生の見事なフランス語による司会で雰囲気が一気に和み、講師の米津先生とも、あうんの呼吸のやりとりでした。三野会長の流暢なフランス語も加わり、参加者は「フランス語のレッスン」と「一流シェフによるお料理教室」を楽しみました。フランス語がわかる人はもちろん、わからない人も楽しめるお料理講習会となりました。



米津先生に習うのは「グリーンピースのポターージュ」(Crème Saint-Germain)です。参加者は米津先生の周りに集まり、お手元を間近に拝見させていただきながら、屈託なく質問していきます。「玉ねぎを炒めることをフランスでは玉ねぎに汗をかかせるというんですよ。はい、これをフランス語では…?」という調子です。菜宴の久保田シェフが用意してくださっていたお鍋と差し替えるところでは、「まるでテレビのお料理番組そのものだ」と大笑い。「ミキサーでこんなに滑らかなポターージュが作れるなんて…」と皆さんびっくりされていました。



後半は、久保田シェフが作ってくださったグリーンピースのポターージュと白ネギとゴボウのクリームパスタとパンナコッタ(ブルーベリーソース添え)をいただきました。グリーンピースのポターージュの見た目の美しさと美味しさ、そして久保田シェフの作ってくださったお料理の美味しさに、感嘆の声があがりました。

本格的なフランス料理を家庭で簡単に美味しく作れる技を、米津先生から伝授していただき、三野会長の「どうぞ米津先生がいつまでもお元気でいらして、こうした集まりが続いていきますように…」とのご挨拶に拍手がわき、とても楽しいフランス・アラカルトでした。(高島眞貴子)

伺っていた米津先生の格式高さよりも、穏やかさ、ユーモア、襟元のおしゃれさに、すっかりリラックスしての時間。ミキサーは2分とタイマーセット。きっちり計るのだなと感心する。家で作って、まめの薄皮まで同化するのにきっちり2分でした(待てずに試し舐めしたんです)。すごい!これがフランス料理。菜宴のお料理にも堪能しました。楽しかった!(長嶺知詠子)



「その国の食文化をささえているもの」

米津春日(よねづ はるび)

食べ物に、美味しさという生命を吹き込むことが、料理人の務めであると思います。一本のニンジンを手にして、どうしたらこのニンジンの美味しさを伝えられるだろうか、形よくむき揃え、美しい色合、軽やかな風味を生かすよう、艶煮にしてみようか。素材をいつくしみ、持味を引き出し、味わう喜びを作り出そう、私はそう思いながら料理を作っています。出来合いのお総菜や、インスタント食品が、街にあふれている現在、家庭の味をもっと大切にしたい、そして、フランス料理の良さを、日本の家庭でも作れる様に工夫をした料理作りをしています。現在、吹田市片山地区の公民館で、主婦の方達と家庭で出来るフランス料理の集いを持ち、地区の方々と楽しくフランス料理を作り、味わい、食に関してのお話の輪を広げて居ります。今回は、久保田シェフのご協力で楽しい会になりました。美味しいものを食べている方々の顔は幸せに満ちています。その笑顔に出会うのが作り手が求めている無上の喜びだと思います。

会員紹介

「音」に魅せられて

青山 登美子（あおやま とみこ）

2013年6月22日 Musikfest NARA で私、藤間勘登美（ふじま かとみ）は奈良市民の前にデビューしました。ピアニスト三澤知香さん（当協会会員）とのコラボでバッハ「フランス組曲」を踊りました。一般的な古典の日本舞踊は、それ以前から仕事としてやっていましたが、クラシック音楽とのコラボはその時が初めてです。私は子供の頃から音楽が好きで、ラジオから流れる曲を音階で歌ったり、学校の音楽クラブで楽器を演奏したり、親の楽しみで日本舞踊を習ったりと、「音」は小さい頃から生活の一部でした。

この10年ほど、私にとって一番自然な日本舞踊へ戻ってきました。舞台発表や生徒への稽古が仕事ですが、生徒は外国人ツーリストで、大部分がフランス人です。私はフランス語の音にも魅せられているので、踊りを教えながらフランス語を話すという、心豊かな仕事をしています。生徒の中にはコンテンポラリーダンサーやオーボエ奏者やコメディアンもいて、そういう職業の方だからこそ日本舞踊の奥の深さを理解できるようです。もとの歌詞は今様（七五調）ですが、稽古の時は、必ずレジュメまたは私なりの翻訳を渡すようにしています。



先日、日仏協会で、能をフランス語で読む講座が、山本邦彦先生の指導のもとで行われました。早速、出席し、普段から疑問に思っていた古典文の訳し方を十分に学びました。接続詞の使い方、挿入句の訳し方、固有名詞の書き順などなど。また難しいのが、韻文の作り方ですが、十分に解説して頂きました。趣味の講座としては、少し肩の凝るものだったかもしれませんが、私にとっては大変実用的な機会でした。今回だけでなく時々やって頂ければ、幸いです。先生のご指導で私の翻訳の力が増せば、またフランス人指導の機会も増えるかもしれません。そんな活動が、日本人の古典舞踊への興味が復活するきっかけになればと思います。「音」に関わる今の仕事が、フランスでも出来るように、と願っています。

「言葉」と「音楽」

荒木 まどか

私はハープの勉強をするためにフランスのリヨンで3年、スイスのジュネーブで6年を過ごしました。フランス文化圏を留学先に選んだのは、私が演奏しているグランドハープ（ペダルが7本ついているハープ）が、フランスで飛躍的に発達し、憧れの奏者も楽曲も存在する所だったからです。19世紀にピアノ製作で有名なエラール社とプレイエル社が、あらゆる調のソロ演奏に応えられるハープの開発にしのぎを削っていました。自社作の楽器のために、当時フランスで売れっ子だった作曲家たちに作品を依頼したので、今も稀少なハープのためのソロ曲が残されています。このような歴史があるからでしょうか、フランスの子供たちの音楽の習い事では、ギターやアコーディオンに並んでレバーハープ（ペダルの無い小型のハープ）にも人気があるそうです。私が習い始めた時は、地元の三重県に先生がいらっしゃらなかったもので、指導メソッドが成立しているのも魅力の一つでした。



高校を卒業してすぐに渡仏しましたが、ほとんどフランス語を話すことができませんでした。それでも楽器を介したレッスンでは、困ることはほとんど無く、言葉を学ぶ時間を惜しんでハープの練習をしていました。ある日、先生に「フランス音楽のフレージングは、フランス語の言葉をわかって初めて本当に理解できるのよ。日本の音楽でも同じでしょう。」と言われました。私にとっては音楽の時間が大切で、どちらかと言えば余分な生活の時間とのジレンマがありましたが、先生の言葉でふたつの時間は対立するものではないのだと、晴れやかな気持ちになったことを覚えています。それがきっかけで、フランス語も必死で勉強するようになりました。言葉もハープも日ごとに未知の世界が広がるばかりですが、それを楽しめるよう努めて行きたいと思っています。

Nos amis francophones à Nara (3) ピエール・レニエさん

4年ほど前に家族とともに奈良にやってきました。以来、私たちは奈良ののんびりした生活をととても好んでいます。奈良日仏協会の会員の方たちとはこれまで様々な機会での出会いを楽しんできました。とくに最近、浄瑠璃寺について話し、みなさんと一緒にお寺に訪れることができました。私は日本の仏教に大いに関心があり、学生時代はパリの大学で日本の仏教について勉強する機会がありました。それ以来、この分野の翻訳をたくさんしてきましたし、今もしています。奈良は、私にとってそのためとても興味深い町であり、また京都・高野山・大峰山のような文化と宗教の中心地に近いという地の利にも恵まれています。しばらく前から私は個人で「般若心経」(Sûtra du Cœur)とその註釈の翻訳に取り組んでいます。とくに空海、最澄、道元、あるいは智光といった、日本の仏教史上の偉大な僧たちがこのお経の註釈を行っています。智光は、奈良時代の元興寺にいた僧で、彼は「般若心経」の日本語の註釈をはじめて行った人物です。奈良日仏協会の会員の方で、仏教や仏教のテキストのフランス語の翻訳に興味のある方と、一緒にお話しできる機会があれば、大変うれしく思います。



(連絡先: p.regnier@hotmail.com)

《2015 年度第 6 回理事会報告》

……事務局

日時: 2015 年 10 月 1 日 (木) 15:00~16:30 場所: 菜宴
出席者: 三野、ジャメ、野島、井田、浅井、高島、中辻、藤村、三木、濱
議題 1. HP 設置: 8 月上旬に完成、10 万 9000 円の支出。
議題 2. 郵便物受取先: 来年度から現在の「私書箱」から「菜宴」に変更する予定。次号 Mon Nara で正式に告知。
議題 3. 今年度会費納入状況: 暫定会員 102、未納会員 10。
議題 4. 7/16 の理事会後の活動報告: 第 126 回フランスアラカルト(7/25)、日独協会主催行事参加 (7/25)、第 127 回フランスアラカルト(9/7)、ガイドクラブ勉強会 (9/19)。
議題 5. 今後の活動: ガイドクラブ浄瑠璃寺散策 (10/10)、第 39 回シネクラブ例会(10/25)、秋の教養講座(11/23) - 野島正興氏講演 (Mon Nara 本号巻頭ページに案内)、講演会後、菜宴にて懇親会。申込み方法は本号同封のチラシ参照。
議題 6. Mon Nara: 272 号巻頭記事、「秋の教養講座」報告。
議題 7. 今後のフランコフォンの留学生参加行事のあり方について確認。

次回理事会: 11 月 19 日 (木) 15:00~16:30

会員通信

- ★福西百代さんが、このたびピアノの楽譜『ピアノ ♪ ナビゲーション 中級編 これなら続けられる! 色とりどりの小曲を弾くうちに名曲の世界へ』を出版されました。会員 5 名の方にプレゼントして下さるそうです。連絡先: 090-2389-9587 (福西)
- ★11 月 2 日 (月) ~ 8 日 (日)、生駒市「たけまるホール」他にて、「第 6 回こま国際音楽祭」開催。どの日も楽しんでいただけると思います。連絡先: 090-1712-1439 (辻)
- ★11 月 21 日 (土) ~ 29 日 (日)、宇陀市 Foyer Vert にて、「陶灯展 & ピアノ演奏」開催。連絡先: 090-8751-6408 (藤村)
- ★12 月 25 日 (金) 18:30、いずみホールにて、大阪アーティスト協会主催コンサート「クリスマスに贈る音の花束」三木康子さんピアノ出演、ラヴェル作曲「ラ・ヴァルス」(超絶技巧ピアノ独奏版)。連絡先: 0742-61-8225 (三木)



編集後記

☆8 月後半にブルターニュを旅しました。レンヌやオーレ周辺の家の庭や公園で満開に咲くネムの花を目にして、どこかなつかしい気がしました。☆「象潟や雨に西施がねぶの花」(芭蕉)「雨の日やまだきにくれてねむの花」(蕪村)の俳句や万葉集等で詠われているせいか、ネムという日本の花のイメージがありました。☆フランス語名を調べてみると、「albizia」「arbre à soie」「Mimosa de Constantinople」等ありましたが、一般にはあまり知られておらず、アジアが原産のようです。☆生駒の山野では例年 7 月はじめに咲いて、ほどなく散ってしまいます。☆上の写真は、聖母マリアの母親の聖アンナ(イエス・キリストの祖母)への信仰の巡礼地サンタンヌドーレ(Sainte-Anne-d'Auray)に咲いていたネムですが、見た目は日本のものと同じです。ブルターニュの地にこの花がもたらされたのはいつ頃なのか、興味がわきました。☆『ブルターニュへの旅—フランス文化の基層を求めて』(田辺保著、朝日選書、1992 年)をガイドブックかわりに持参したおかげで、この中世の巡礼地に訪れることができました。☆他にも様々な歴史や伝説をもつ海・島・土地をめぐり、自然の美しさにたくさん触れてきました。☆帰宅してから、フローベールの『ブルターニュ紀行—野を越え、浜を越え』の頁をめくると、以前読んだ時には少し退屈に思えた所が面白く感じられ、旅の「魔法」を感じています。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は **11 月 30 日**が原稿締切日です。

Mon Nara

sep-oct 2015 **9-10 月**合併号 numéro271

奈良日仏協会

Association Franco-Japonaise de Nara

HP: <http://www.afjn.jp> E-mail: afjn_info@kcn.jp FAX 0742-62-1741

〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第 30 号[郵便物のみ] ©発行責任者: 三野博司